

南方（ニューギニア）

ラバウル

月兵团工兵隊

鳥取県 伊藤 藤 静 男

大正十一年六月十四日、鳥取県東伯郡灘手村津原、現在の倉吉市津原で生まれました。私が岡山の工兵連隊へ入営した昭和十七年十二月一日頃、父は、中国の北京、保定と戦地にあった歩兵第一六三連隊から召集解除となり家へ帰って来ました。まさに、父と長男とが交替で軍隊に勤務したことになるわけです。後になって、親子二代軍隊へ行ってももらえなかったなあ、と笑ったものです。

父の所属した歩兵第一六三連隊というのは、第一〇師団（警兵団）の松江編成の連隊で、支那事変が勃発してから編成されたもので、第十師団、第十七師団と同様、姫路（岡山）の兄弟連隊でした。終戦まで北支で活躍していた部隊ですので、私も北支要員だと思っていました。

昭和十七年十二月入営し、岡山の工兵第五十四連隊の留守隊で工兵の基本教育を受けました。初年兵教育はどの兵科も同じといいますが、工兵は特に厳しく、敵前上陸の訓練もしましたから、舟艇も漕がされました。地震の時は非常呼集のラッパが吹奏され集合した記憶もあります。無我夢中の三カ月間、内地での初年兵教育で一期の検閲も終了しました。

兵籍簿によれば、昭和十七年十二月一日、工兵第五十四連隊に入隊とありますが、後で調べてみたら、この連隊は昭和十五年七月、姫路で編成された第五十四師団（兵二つもの二兵団）でした。その後直ちに工兵第一〇連隊（第一〇師団二鷹兵団）に入り、六月二十二日、第十七師団工兵第十七連隊（月兵団）の要員となりました。

下関を出発し、釜山上陸、朝鮮經由―山海関で中国大陸に入り徐州駐屯でした。中国の初夏は柳が芽を吹いて、歌にある「柳芽を吹くクリークで、泥にまみれた軍服を……」と洗濯したこともありましたが、実際はそんな余裕のあるのんびりとした初年兵ではありませんでした。

北支は共産八路軍の巢ですから、向こうから撃ってきます。しかし、工兵は銃器を歩兵のように持っていません。特に工兵単独での応戦ですから、八路軍は、こちらが少数、戦力が弱いと見ると攻撃してきます。大勢で強いと見ると退去するという戦法でした。従って、戦闘本分でない工兵と言えども自分を守らねばな

りませんから、積極的に共産軍を攻撃していました。

討伐は四六時中で、夜出て行って朝帰隊します。兵力は少なく工兵だけの出動ですから、一個小隊単位くらいで戦闘行動をしなければなりませんでした。

その頃はまだ一等兵の初年兵でしたので、弾の音も初めて聞きました。河北省の石家荘には大きな城壁がありました。その時も工兵だけでした。歩兵と一緒にいないのですから、こちらには小銃と軽機関銃ぐらいしかありません。八路軍はラップを吹いて進撃してきます。砲も引いてきます。心細い戦いです、犠牲は出るしで、私も負傷しませんでした。随分苦労したものです。

月兵団の歌にあるとおり、師団は武漢攻略戦線で武勲があり、蘇州・徐州を根拠地として、宜昌作戦・漢水・予南・魯南作戦、更には昭和十七年には中支の航空基地を攻略した浙贛作戦等、北・中支の作戦に常に参加していたといえます。この我が師団も昭和十八年秋頃になると南方へ行くという噂の如く、ビスマルク諸島へ進出し、今度は米豪軍と戦う、いわゆる、ラバ

ウルの戦いに入ったのです。

中国を出発し、その当時は南方への航路では、空襲はあるし、潜水艦は出沒するしで、毎日が苦難と不安の連続でした。ようやくラバウルに着いて、昭和十八年十月二十日から十九年四月二十四日まで、ビスマルク諸島に出かけましたが、多数の敵が上陸していて、敵前上陸するのは犠牲が出ます。我々は戦闘を主とする歩・砲兵でない工兵ですから、島に上陸して陣地等を構築するのです。「ク号作戦」と呼ばれた作戦でした。

敵の方が兵力が多く、我が軍は食料は何もありません。ラバウルで揚陸した荷物を椰子の下に積んでおいたがB29の爆撃機にやられ、食料も弾薬もなくなってしまうました。以来、主食の補給は無いので食物は無く、止むなく、ジャングルにいるひきがえるを獲りましたが、当初知らぬので、そのまま食べたら体がしびれてしまいました。その後、血液を抜いて食べるようにしたら肉は鶏肉のよう、食用蛙のようで美味でした。

た。また、大きな蛇を獲って、兵員の食料、副食、蛋白質養源としていました。

しかし、主食がありません。当初は土民の栽培している芋を取って食べていましたが、後には、ジャングルを開墾し、さつまい芋を栽培し、その小さいのを食べたり、タピオカや椰子の実を取って食べていました。しかし、火を燃やせば煙が出るので敵の戦闘機から銃撃されます。どこで偵察しているのか判りませんが、少しでも火や煙が見えたら、時間かまわず銃撃してきます。しかも弾丸には瞬発信管が付いていて、貫通するのではなく、当たったらそこで破裂するのです。従って被害は大きくなります。もちろん人間に当たれば、小さな砲弾が当たったのと同じですから、ほとんど即死か、重傷、出血多量で死んでしまうのです。

ビスマルク諸島には、昭和十九年四月二十四日、撤退までの半年間頑張ったのですが、衆寡敵せずというか、兵力も、兵器も、食料も、米豪軍とは比較にならないほど少なく、半年間の苦闘、多数の犠牲を出しながら

ら、我々工兵隊も敵に追い返されてしまったのです。結局物量に負けたのでしょうか。

ラバウルでの米豪軍は、上陸はしないけれども、銃・爆撃で我が軍を島に封じ込めて外へ出られぬように作戦が変更されたのでした。飛行機による攻撃は休みなしに來ます。しかも、我が軍の所在を的確にとらえています。それは、土民が米豪軍に情報を提供し、スパイをしていたのです。土民は我々を常に見ている、行動を観察していました。日本軍は土民に対し宣撫工作として、塩やタバコをやるのですが、彼等はスパイを続けていました。ですから、米豪軍は日本軍の状況を良く知っていて、飛行機による銃・爆撃をされ、ラバウルでも苦勞をし、私の戦友も随分戦死しています。

ビスマルク諸島方面では、日本の軍も、第三次、第四次、第五次と作戦を続け、我々もその作戦に参加したわけです。ラバウルには高い火山があり、その岩山に要塞を我々工兵が中心となって築いたのです。

ラバウル周辺には、我々の第十七師団の他に九州の第六師団、東海地方の第三十八師団が配備されていました。その他に、独立工兵隊が東北地方からも來ていました。

要塞の構築はこれら工兵隊の仕事でした。山の中に壕、トンネルを掘るのですから、その分余計、土木の連中がいるのです。本職の工兵が石山の中で発破（ダイナマイト）をかけ、残土や石は歩兵が運びます。全軍の命令のもと各兵科が協力して、砕けない堅固な、艦砲射撃や銃・爆撃にビクともしない要塞が出來たのです。要塞の中に零戦も隠してあり、飛行場もそこにはありません。

ラバウル要塞はトンネルや避難壕だけでなく、その中から砲を出して撃つ、難攻不落の城郭ですから、米軍も上陸して來られません。従って連合軍はラバウルを包囲し、出られぬように銃・爆撃、艦砲射撃をする程度にし、あえて上陸はして來なかつたのです。そして、敵の主力はラバウルを越えて北上し、マリアナ、フィリピン、沖繩、本土の攻略へと向かつて

いったわけです。

封鎖されたラバウルでは、ジャングルを開拓して芋を作りました。温度が高い所なので一カ月もしたら芋は食べられません。山の水は綺麗で飲料水にはことかきませんでした。しかし、病気による犠牲は多くなりました。マリアアでは随分多くの人が死にました。私の同年兵も半分はマリアアを患いました。高熱と悪寒が連続するこの病気は、肝臓や脾臓をやられます。栄養失調者は高熱により歩行が困難になります。このようにして多くの人が戦病死しています。薬はキニーネですが、導火線を薬にしていたと聞いています。窮余の知恵か、天の助けであったのかも知れません。

結局、終戦まで連合軍は上陸も出来ず、攻めてもきませんでした。日本の心臓部本土を陥落させるのが目的で、ラバウルで犠牲を出したくなかったとのことは戦後聞きました。

一年余の持久戦の後に我々は終戦を知りました。豪州兵が来て武装解除をしましたが、戦犯は出なかつたようです。

今村方面軍司令官は内地に一時復員して、戻ってきました。各部隊の軍紀もきちんと守られていました。上から下まで一体となっていました。戦後の戦友会に連隊長や中隊長も出席しています。皆一緒に苦労していたので、今でもまとまって戦友会を続け、お互いが、親・兄弟よりも何でも話せる仲になっています。

「月」七三八八部隊、工兵第十七連隊の歌

一 群がる妖雲払わんと、皇軍進む大東亜、

皇ら畏む武夫の、襟、鳶色の意気高く、

生まれ出でたる部隊こそ、月七三八八健男児

二 揚子の流れ魔の黄河、唸る機舟のたのもしさ、

渦巻く濁流何のその、腕も折れよと漕ぎ渡す、

河川突破の勲は、月七三八八健男児

少し違ふか抜けた所があるかもしれませんが、これが我が部隊の歌で、戦友会の度ごとに、皆で合唱しています。

昭和二十一年三月二十一日、ラバウル出帆、四月に内地に帰りました。上陸したのは神奈川県浦賀でした。

帰る時、二〇〇円ぐらいもらった記憶があります。が、駅の付近で、腹が減ったのでうどんを食べたりしたら無くなってしまいました。駅で、浦賀から山陰線の倉吉までの切符をくれました。また「兵隊さんご苦労さん」といってパンもくれました。

私は内地へ帰っても金も無し、職も無しでしたが、工兵の時に教わった自動車の運転を職業とし、徐々に仕事を広げ、今は会社として土木建築を業としています。

工兵隊として随分厳しい教育を受け、北支、ラバウルと転戦し、この苦勞が今の私を作り、事業を作ったと思っっているのです、戦友との関係を大切にしている今日です。

第三十六師団（雪兵团）

東部ニューギニア戦

山形県 石塚 代次

私は昭和十七年十二月一日、第三十六師団要員として現役入営、中国大陸山西省の部隊に着いたのは十二月十六日でした。山西省の通信隊本部で教育を受け、通信兵として一期の検閲を無事終了し、有線兵として勤務に就いていました。

北支は、ご承知のごとく共産軍の勢力が強く、八路軍との戦闘も三回程体験しました。通信兵は戦闘部隊ではなく、隊と本部、隊と隊の間に線を引いて通信するのです。従って、有線敷設の距離は長く、その間を守るのはほとんど自分たちでしなければなりません。兵器を持たぬ通信兵は度々敵の襲撃を受けたり、線を切断されることがあるので、戦闘部隊には無い苦勞の連続であるばかりか、襲撃され犠牲者が出ることも